

はしがき

本書は3部構成である。第1部は古代城館に関する二論文からなる。「古代の城について」は『日本書紀』をはじめとする史書を中心に据えて、主に文献史学的側面から述べたものである。これに対して「西日本の古代山城について——いわゆる「神籠石」を中心として——」は古代城郭としての遺構が明確でありながら史書からは必ずしもその存在が判然としない、いわゆる「神籠石」を先人の知見や自分自身の実地調査による考古学的成果に依拠しながら、朝鮮式山城との時代的關係について述べたものである。二つの論考で明らかにしたかったのは、それまであまり全体像として描かれなかった古代城館の種類や特徴についてである。

ここに私は「古代城館」という用語を用いたが、古代の城に関する論文を見るとそのような表現は見当たらない。しかし蘇我氏のようなトップクラスの居館にも地方豪族の居館にも軍事的設備は存在したのであって、現在ではまだなじみがなくても必ず将来的にはこのような範疇が必要となるはずである。したがって現代では「中世城館」が一般化した状況を踏まえ、ここではあえて「古代城館」とするのである。

第2部は史料に基づいて記した中世人の姿である。「いくさと民衆」は戦乱の世にたくましく、したたかに生きた人々の生き様を描いたものである。ここでは広く鎌倉から室町までの時代を扱っており中世の全期間を対象とした。「北条政子の実像」は一人の人間としての政子を描くために、『吾妻鏡』という根本史料を主として使いながらも、あえて『源平盛衰記』や『曾我物語』なども引用した。「中世堅田の党と惣」は修士論文の要点をまとめたものであるが、ここでも琵琶湖で古代以来の漁業権をふりかざす一方で、商業活動の活発化に伴い港湾を維持し、いわゆる湖上特権を獲得した堅田の人々、とりわけ地侍層の活動を記したものである。

「南北朝時代の鎮西御家人について」では、舞台が九州に移る。時間的にも南北朝時代の約60年間に限定される。その中で軍忠状の分析を行って、鎮西における国人領主級の武士たちがどのような理由から「御家人」を自称したかを明らかにした。「近世からみた奥州御家人」では、『衆臣家譜』という近世相馬藩に伝わった家譜集を拠り所として、鎌倉御家人のその後を検討した結果、近世の家譜さえも中世奥羽における史実の一端を示すに十分な手がかりとなることを証明した。「秋保氏の出自について」では、再び奥州御家人について触れる。秋保氏は得宗被官の長崎氏に出自を求めることができるが、系図上では平重盛子孫であることを主張した。小論では何故そのようなことが起こったのかについて考察した。

第3部には「『吾妻鏡』の城館について」、「『太平記』の城館」、「『要害』について」のように史料に拠って論述するという第2部の範疇に入るものもあるが、中世城館を正面から取り扱うものとして第3部に含めた。「阿津賀志山防塁を考える」も史料から読み取る部分と考古学的成果とを融合する形で記述した。

「中世城館発掘の一視点」は、中世考古学が日本の考古学会でようやく認知されはじめた頃にしたものである。戦時下ばかりが特化されがちであった従来の城館の見方に警鐘を鳴らしたものである。白石城跡以下平賀館跡までの測量記は、「縄張り図」などとも称される歩測による城館跡図に対して、より精確に、客観的に城を復元させたいという意欲の下、ゼミ生のボランティアと測量機器や交通費などそのほとんどを自費で賄って行った測量調査の結果報告である。「北緯38度以北の要害(1)(2)」は、岩手県南部から宮城県北部にかけて異様なまでに集中的に存在する「要害」について個別調査した結果の報告である。

「日欧の城郭について」は封建制社会をともに経験した日本と西欧との城郭を取り上げ、その相違点に注目した。